

2022年10月23日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 12章 13～17節

説教題：「神のものは神に」

カナダにいる時、あるメノナイト教会の方から「カナダの政治」について話を聞く機会がありました。その人は教会で歌うことが大好きでしたが、私は、彼が讚美歌以外の歌を歌っている姿をイメージすることが出来ませんでした。政治の話をしてきたこともあって、「この人は『Oh, Canada—(カナダ国家)』を歌うのだろうか」とフト思いました。「Oh, Canada」は、「神がカナダを祝して下さるように」という、「神が主語」の歌なのですが、それでも「愛国主義」的な歌なので、私は単純に興味があって聞きました。「あなたは『Oh, Canada』を歌うのですか」。そうしたら、彼は言いました。「イエス様も『カイザルのものはカイザルに…』と言われていただろう。だから歌うよ」。

そのように「カイザルのものはカイザルに返しなさい…神のものは神に返しなさい」(17)の言葉は、「教会と国家」、「信仰と政治」といった問題を語る時に、良く引用される言葉ではないかと思えます。しかし、私はこの箇所を学んで、イエスが「カイザルのものはカイザルに返しなさい…神のものは神に返しなさい」の言葉に込められた意味を改めて教えられたような思いがします。「内容」と「信仰生活への適用」とお話しします。

1：内容…「カイザルのものはカイザルに返す」

13節に「彼らは、イエスに何か言わせて、わなに陥れようとして、パリサイ人とヘロデ党の者数人をイエスのところへ送った」(13)とあります。「受難週」の火曜日の出来事が続いています。イエスは、これまで「祭司長、律法学者、長老達」を相手に議論をして来られました。「彼ら」というのは、「祭司長、律法学者、長老達」でしょう。「宮聖め」によって「イエスへの敵意」を決定的にした彼らは、すでに「イエスを殺そう」と思っていました。しかし彼らには、「指導者」としての立場があります。出来るだけ合法的にイエスを葬り去らなければなりません。イエスが法に背く者であることを明らかにするか、「イエスを潰そうとする自分達の方が正しい」と人々から認められる道を探らなければなりません。そうした状況で彼らは、パリサイ派の者とヘロデ党の者をイエスに送ります。パリサイ派は、ユダヤ至上主義、どちらかという反ローマ派です。ヘロデ党は、親ローマ派です。この両者は、普段は仲が悪いのです。その対立している者達が手を携えてやって来たのです。それだけでも怪しい接触です。

彼らは、1つの質問をします。「カイザル(皇帝)に税金を納めることは律法にかなっていることでしょうか、かなっていないことでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないのでしょうか」(14)。当時ユダヤは、ローマ帝国から送られた総督によって統治されていて、その下で最高議会が自治政府として自治を行っていました。「ローマに支配されている」ということは、具体的には「ローマに税金を徴収されている」ということでした。自分達が望んだことではありません。心ならずも支配され、嫌々ながら税金を払っているのです。しかもユダヤ人にとって税金は、癩に障るだけではなく、「異邦人であるローマ皇帝に税金を納めることは、ユダヤの神を信じない者を王として認めることになり、それは神に背くことになるのではないか」、そういう信仰的な問題でした。事実、熱心党と呼ばれる過激なグループは、納税を拒否していました。やがて彼らは潰されるのですが…。そのように非常に微妙な—(起爆剤のような)—問題でした。

ユダヤ人の多くは、税金から解放されることを願っています。そして彼らが待望しているメシア—(神からの遣い)—は、ローマの税金から解放してくれる人でなければならなかったのです。人々はイエスに、その期待を持っています。もしイエスが「皇帝に税金を納めることは良いことだ、神の道に適っている」と答えるなら、それは直ちにイエスの回りに集まっている人々を失望させ、イエスから引き離すことになりました。一般の人々にとって、その答えは「イエスは神から遣わされた者ではない」という判断の材料になったのです。一方、「ローマに税金を納めなくても良い」と言えば、直ちに「ローマへの反逆を扇動した」と言うことでローマに訴え、ローマの手で—(自分達の手を汚さずに)—イエスを処刑することが出来ました。どちらに答えても、イエスを不利な状況に追い込むことが出来る質問だったのです。そ

のために—(イエスがどちらに答えてもその後の段取りが取れるように)—反対の立場の人々が手を携えてやって来たのだと思います。

それに対してイエスは、答の取っ掛かりを「デナリ銀貨を持って来て見せなさい」(15)というところに求められます。デナリ銀貨というのは、ローマの貨幣です。その銀貨には当時の皇帝(カイザル)である「ティベリウスの肖像」と「ローマ皇帝は神の子である」という文字が刻印されていました。イエスは持っておられませんでした、彼らは持っていました。それは、彼らが普段からデナリ銀貨を持ち歩き、使っていたということです。特にローマに税金—(通行税その他)—を納めるために持ち歩いていたのでしょう。「カイザルに税金を納めることは律法にかなっていることでしょうか、かなっていないことでしょうか。納めるべきでしょうか。納めるべきでないのでしょうか」(14)と彼らは聞いて来ました。しかし現実には、ローマ皇帝に税金を納めることを前提として生きているのです。イエスは聞かれます。「これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか」(16)。彼らは嫌でも「カイザル(皇帝)のものです」と言わざるを得ません。そこで「カイザルのものはカイザルに返しなさい」と言われたのです。

「カイザルのものはカイザルに返しなさい」とはどういう意味なのか。「カイザルのもの」というのは、現実の政治支配に関することでしょう。現実として彼らは、ローマ帝国の下でカイザルの支配を受け入れながら暮らしています。税金を納めることを前提として生きているのです。だからイエスが言われた「カイザルのものはカイザルに…」は、「キリスト者と政治の関係の原則について教えよう」とされたと言うより、むしろ、彼らの偽善を指摘した言葉なのです。それは「あなた達は既に皇帝の権威を認めて、受け入れているではないか。改めて問わなくても、あなた達がしているようにしたら良いではないか」、そういう意味の言葉だと思います。要するにイエスは、彼らの「偽り」を暴いて、それを返事とされたのです。しかしイエス様は、そこで議論を収めるのではなくて、彼らが本当に問わなければならないことに彼らの目を向けさせられるのです。それが「神のものは神に返しなさい」の言葉なのです。

「神のもの」とは何でしょうか。「カイザルのもの」を「税金」が象徴したように、「神のもの」とは「神殿税」でしょうか。そうではありません。デナリ貨幣には、皇帝の像が刻まれていました。だから「皇帝のものだ」と、イエスは言われました。同じように、神の像が刻まれているものがあるのです。私達一人ひとりです。「創世記」には「神は…人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女に彼らを創造された」(創世記 1:27)とあります。私達は皆、神の姿を宿している。心には神の言葉が刻まれている。良心の声です。私達には「神の肖像と神の銘」が刻まれているのです。イエスがここで言われたのは「税金については、改めて問わなくても、いつもしているようにすれば良いではないか。しかし本当に問わなければならないことは、ローマに税金を納めることが律法に—(神の御心に)—適っているかどうかではない。その前に、あなた達自身が『神のもの』として、本当に神の主権を認めて、自分を神に返しているかどうかなのだ」ということだったのです。

2: 適用…「神のものは神に返す」

では「自分を神に返す」とはどういうことでしょうか。

私は、兄弟姉妹のご葬儀の説教をさせて頂きながら—(お別れは悲しいですが、一方で)—「天国が約束されているということは幸いなことだなあ」と思うことが多いのです。「天国が約束されている」ということは、「死んだ時に突然、天国に運ばれて行く」ということではありません。「天国へ向かうその生涯を、主が導いて下さる」ということです。悲しみの時には慰め、助けが要る時には助けを与え、人生のあらゆる場面に恵みを添えて下さる、ということです。死の間際にも、私達はそこで主の「恐れるな、安心しなさい」の声を聞くのです。そのような恵みに対して、私は何かしたかということ、自分の歩みを振り返ると、何もしていない。ただ憐れみによって神のものとされ、恵みの中を生かされて行く、その幸いを思います。その幸いは、「イエスの十字架と復活」にかかっているのです。私達には「十字架と復活」という土台の上に生かされている今があり、私達は「十字架と復活」によって開かれた天国への道を天に向かって歩いているのです。そう思った時、今置かれている状況そのものが測り知れない感謝なことだと思います。私は、ただ神様に心からの感謝を捧げて、与えられた人生を精一杯生きて行く、そ

れを神様は喜ばれるような気がします。それが「自分を神様に返して行く」、1つの返し方ではないか、そんな気がします。

しかし、もう少しこの個所に沿って考えてみましょう。この議論は、そもそも「宮聖め」から始まったのです。「宮聖め」、それはすなわち、神殿の礼拝行事は賑やかに行われている、けれども人々は、神の喜ばれることを選び取り、神の御心に生きようとはしていない、その人々の姿をイエスが悲しみ、怒られた出来事でした。イエスは「神の御心に従って生きることを求めなさい」と言われました。ここでもその声が響いているのです。

この箇所が一番の問題は何かというと、彼らがイエスを口では褒めながら、畏にかけようとしてやって来たことですが、もう一步踏み込んで考えると…。彼らはイエス様に言います。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方だと存じています。あなたは人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです」(14)。私達は、人の顔色をみます。人を、社会の組織を恐れます。しかしイエス様は「人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられる」。しかし、彼らが本当にそう思っているなら、イエスが何かを教えられたら、それに従って生き方を変える用意がなければならぬはず。しかし彼らは、イエス様が何を言おうが、その言葉によって自分を変えよう等とは思っていない。そんな気持ちは全くない。それが私達にとってもチャレンジです。

つまり、私達が「自分を神に返す」とは、イエス様の言葉を真理の言葉と信じるなら、私達も主の言葉を聞いた時に、神様に誠実を尽くして、精一杯、その言葉によって自分の生き方を変える、変えられる用意がなければならぬ、ということではないでしょうか。私達は、自分を神に捧げるように、神の言葉によって生かされようとしているのか。それがここで問われることなのではないでしょうか。

ファン・ティー・キム・フックという方がおられます。この方は、少女の時代にベトナム戦争を経験しました。彼女は、アメリカ軍が彼女の村に投下したナパーム弾によって全身火傷の瀕死の重傷を負いました。何とか一命は取り留めたものの、以後12年間に17回の手術を受け、退院後も辛いリハビリを経験しました。回復はしたものの、体には大きな傷跡が残りました。「私をこんな目に遭わせた人達が死ぬほど憎い。彼らを同じように苦しませてやりたい」。怒りと憎しみは呪いとなって行きました。でも憎み続けることが辛かった。心を変えたかったのです。ある時、聖書に出会い、教会に導かれ、「誰でも心を開いてイエスを迎えるなら、その人の心にイエスが住み、重荷を取って下さる」というメッセージに触れ、「心の重荷を取って欲しい。平安を与えられたい」とイエスを信じる決心をしました。それから色々なことがあったのですが、受洗から10年が過ぎた頃、彼女は改めてイエス様の言葉を聞いたのです。「あなたの敵を愛し…あなたを憎む者に善を行い…のろう者を祝福し…侮辱する者のために祈りなさい」(ルカ6:27~28)。彼女は「こんな御言葉は実行できない。絶対無理だ」と感じました。しかし彼女は祈り始め、具体的に3つのことを始めました。1つは「なんで私なの」と言うことを止めました。代わりに「どうか私を救って下さい」と願いました。2つ目は「神様を信じて従おうとすること」を言い聞かせました。3つ目は「文句を言う代わりに、自分に与えられた祝福や素晴らしい出来事を数えること」です。4発のナパーム弾の真ん中にいた彼女は、死んでいても不思議ではなかった。でも生き延びた。そんな不思議を数え始めた。3つのことをしながら、さらに自分に苦しみを負わせた人達の名前を祈りのリストに加えて祈りました。長い時間がかかりました。でも敵である人のために祈れば祈るほど、彼女の心は柔らかくなって行きました。そしてある時、神様からの恵みが注がれました。「赦し」を実感することができたのです。彼女を苦しめていた「憎しみの心」から解放されたのです。その時は楽園にいるような思いだったそうです。やがて彼女は、彼女の村にナパーム弾を落としたアメリカ兵に遭うのです。彼の方は「民間人を傷つけた」という罪悪感に苦しみ続けていました。彼は、キム・フックさんに遭うなり謝罪を続けました。その彼を、キム・フックさんは抱きしめ、「もう赦している」と伝え、2人で祈ったのです。

私は、彼女に教えられます。彼女にとってイエス様の言葉に従って自分を変えることは辛いことでした。私達も簡単に自分を変えることはできないでしょう。でも主の言葉によって自分を変えられるように願う、そういう信仰の誠実さを持ち続けることは大切ではないでしょうか。そして彼女が教えてくれ

るのは、祈りながら自分を変える作業、イエス様に従う作業に取り組んだということです。申し上げたように、私達は自分の力で自分を変えることはできないでしょう。祈りながら神に働いて頂かなければ、変わることはできないのではないのでしょうか。私達には彼女のような劇的な体験はないかも知れない。しかし「イエス様の言葉によって自分の生き方を神に捧げる(神に返す)」その思いにおいては、同じところに立ちたいと願うのです。それが私達の信仰生活を前に導くのではないのでしょうか。

しかし、そうやって神に自分を返して行く時、恵みもあるのです。もう1つの証しを紹介して終わります。ある牧師の奥さんに胎の実が与えられました。しかし病院で診察すると、出産のためには産道を開く手術をしなければならぬ、ということになりました。ところがお医者さんから「手術では子宮をいじらなければなりませんので、お腹の赤ちゃんはダメかもしれません」と言われました。夫婦ともショックを受け、「神様、助けて下さい」と泣きながら祈るしかありませんでした。ところが手術の前日、奥さんのお母さんが来て、メソメソしている娘に向かって言ったのです。「あなたはクリスチャンでしょ。だったら、神のものは神に返しなさい。お腹の子は神様のものでしょ」。お母さんはクリスチャンではありません。でも聖書を必死に読んで、この言葉にぶつかって、何かを感じて伝えたのです。奥さんはその夜、次の日の手術を思っただけで眠れない夜を過ごしている時、このイエス様の言葉がよみがえって来たのです。そして『神のものは神に返しなさい』。そうだ、お腹の子は神様のものだ。もし神様が召されるのなら、それが神様の御心であり、それは一番良いことなのだ。神様が悪いことをされるはずがない、そう思えたのです。そして、不思議な平安を与えられたのです。手術は成功し、お腹の赤ちゃんも無事でした。夫妻は「御言葉によって生きるということは、こういうことなのか」と教えられたそうです。この先生は言うのです。『神のものは神に返しなさい』というこの主イエスの御言葉は、自分の持っているものを自分のものと思うが故に、それに縛られ、自由になることが出来ないでいる私共に対し、安心してそれを手放し、神様の御手に委ね、私共を自由にする、そういう恵みに満ちた、力ある御言葉なのです』。

私達には様々な問題があります。心配事がない人はいないでしょう。しかし、神様に委ねるといふ道があるのではないのでしょうか。イエス様は「神のものは神に返しなさい」(17)と言われます。「安心して神様に委ねなさい。全ては神様の御手の中にあるのだから。神様は私達1人1人を愛しておられるのだから。悪いことはなさないから。大丈夫だから」。そう告げておられるのではないのでしょうか。これが私達への励ましだと思います。

イエス様は言われました。「自分の生き方を神様に捧げなさい。御言葉に本当に生きて行きなさい」。そしてまた語られます。「あなたは神様のもの。神様に委ねなさい」。イエス様の勧めと励ましを心に刻んで、信仰生活の階段をまた1つ、上って行きたいと願います。